

はるにれの会

若いお母さんたちへ

——いい気分・幸せな気分——

宮里 暁美

うちの息子は現在一才三ヶ月。ワンワンが大好きで、犬でも猫でも象でも、みんなワンワンと呼びかけます。家中の引き出しは全て開けようとし、家の中は、ある時はタオルが散乱し、又ある時はくつ下が……といった具合の大騒ぎがくり返されています。さらには、あらゆるでっぱりに足をかけ、なんとしてでも手を伸ばし、よじ登れる所ならどこでも登ってみようとしています。大人用のイス、鏡台、押し入れが、こうして征服されていきました。今日も散歩をしていると、道の横に広い溝のようなものがあり、息子はそこが何となく気になるようで、じっとみていました。そして何回か行ったり来たりし、私の方を見たりし、そのうちペタンと坐り込みました。そして、後向きにそーっと足をおろしてみました。けれども、足は下につきません。あれっという顔でもう少し伸ばしてみたけれど、やっぱり足はつきません。そんなことを何回かくり返し、ダメだな、とあきらめたのか、立ちあがってまた歩き出しました。いつか思い切って手を離してみるか、或いは何かの拍子に手を離すかして下

におりる方法を学ぶのでしょうか……。ちいさいながらも、この意志の強さ、好奇心の強さには驚かされると共に、人間ってたいしたもんだな〜という安心感を持つことの多い毎日です。

それにしても子育てというものは、なかなか煩雑で、特に私が一年間の育児休業を終え職場復帰してから、時間に追われ、心ここにあらず、というような状態さえありました。早く夕食を食べさせて、とにかくお風呂に入れ、すぐ寝ればいいのだけれど……といった何かに追い立てられてでもいるような気持ちでした。寝る時になってぐずりだすと、少し泣けば疲れて寝るんじゃないか、とそのままにしておいたりしました。でも結局は泣きっぱなしで、「もう、早く寝なさい」と言ってもわからぬ子に怒ってしまったりすることもありました。息子は親の気持を察してか、見幕におそれいってか、「うっうっ」と声を殺したり泣いたりし、そんな様子にハッと我に帰り、「ごめんね、ごめんね」とあやまったり、悪戦苦闘の日々でした。

そんなある日のこと、私は、あるお母さんの子育ての記録を通勤途中の電車の中で読みました。そのお母さんは、びっくりするほどに子どものこと（子どもの動き、子どもの気持ち）を大切にしていました。家事をする親のまわりで何かとやってみたがる子に、やりたいことができるやり方でやらせてあげたり、「困る、ダメ」と言ってしまうずに、それではこうしたら、と考えることで、こんなにも親子の世界がひろがるのかと感心させられたのです。

「よし、今日は、ひとつ我が子にゆっくりつきあって夜を過ごしてみよう」と、私は家路に着きました。なんとなくのんびり夕食を食べ、夕食がすんだら、さあ片づけ……とあせるのをちょっとやめてみたのです。

おなかが一杯になった息子はいい気分できっそくおもちゃ箱のところへ行きます。ヨイショヨイショとひっぱり出し、中をかき回し気に入ったものを捜している様子。そばでニコニコしている私に、みつげ出した積木を「あい」と渡してくれます。棒をみつげ、それを穴にさ

し込もうとし、さし込めるとニカッと笑って私の方を見ます。そして又、別のものをとり出したり、とゆったりと遊んでいます。そろそろ寝る時間になったので、「けいちゃん」と呼びかけると、息子はニカッと笑って私の背にべたっともたれかかってきました。「一緒にねんねしようね」と、そのままおんぶして、ふとんの中に突入。ふとんの中で棒と空箱でウーウー言って遊び、ちぎっては母の口に入れようとして笑ったり、そしてコトン、と寝ついてしまいました。

その日のことを、保育園の連絡ノートに記しながら思いました。一日24時間、どう過ごしても動かしようのない数字のように思えるけれど、その時の気持ちの持ち方で、ふくらみもするし、この子の「今」と共に過ごせる時間を大切にしよう。30分、一時間は、他のことを忘れ、息子と同じ空気を吸い、息子と同じリズムで過ごそう、と心にちかったのです。

そうして毎日を過ごしていると、いろいろな発見がありました。

我が家には、父親がダンボールを切ったりはったりして作った小さなすべり台があり、息子はそれがとても気に入っていて、よじ登ったりすべったり、物をころがしたりしてよく遊んでいました。

ある日のこと、トントントンという音が聞こえます。何かしら、と思ってみると、息子がそのすべり台のてんべんに坐って足をブラブラさせ、トントントンと音を出しているのです。とてもいい気分なのでしょう。トン、トン、トン、というリズムが心地よく流れ、ニコニコ笑っていました。そういうえば、まだずっと小さいころにも、うつぶせで寝、上体を起こし、足をパタンパタンとさせていたことがあります。そばで私が真似て足をパタンパタンとさせると、それを見て笑うほどに好きな動作でした。

いろいろな時にいろいろな場所で足をパタンパタンとさせて笑っていた息子を思い出した時、そしてそれが目の前で足をトントントンさせて笑っている息子の姿とだぶり、ああこういうのって、いい気分分っているかんじなん

だな、と思いました。

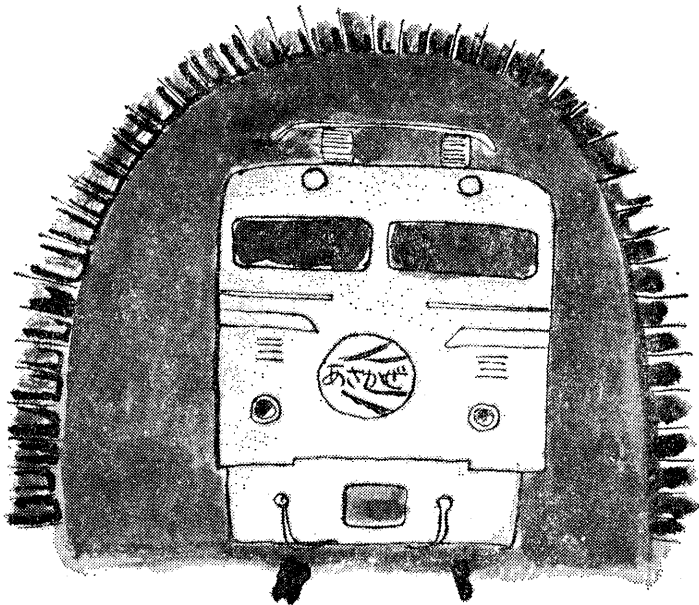
「立てるようになった」「おさじが使えるようになった」というような成長は、容易にとらえることができ、又親の方も心待ちにしていたりします。だからとても印象に残り、人にも話したり、ほめたりします。

けれども、「足ボタンボタンが、とてもいい気分なんだね」ということ、そういう気持ちを息子が感じているということに気づき共感するには、親の方に心の余裕がないとできないのではないのでしょうか。

息子と二人並んで寝そべり、ボタンボタンと足をならす。いかにもうれしそうに顔を見合わせて笑う。そんなひとときが一日の中に10分でもあると、一日が急に大切なもの感じられてくるのです。

思えば、こうして心を通わせ合え、無条件の信頼を寄せてくれる我が子という存在は、親を幾重にも励まし、育ててくれるのですね。

息子の保育園の話を少ししましょう。



息子は公立保育園に入るまでの3ヶ月間、未認可保育園に通いました。そこは、我が家からバスと電車を乗りついで40分もかかるところにあり、寒い冬の通園、そして一年間母親と過した甘えん坊の息子、どうなることか、と心配でしたが、手づくりのあたたかさが感じられる保育園で、今、そこでの日々をふり返ると涙が出るほどになつかしくなるのです。

ある時、園長先生がこんな話をしてくれました。

「一才になったばかりの子たちでも、誰かが泣いていると、どうしたの、と寄ってきて、はいはいの子は、はいはいで寄ってきて、保母と一緒に、泣いている子をさすったり、これ使いなよ、とでも言うようにおもちゃを持ってきたりするんですよ。」

私は、その話をきき、子どもがこんなことをしたということも素敵だけれど、それ以上に「ああ、子どもっていいな、心の中に大切ないいものを持っているな」と信じ、愛してくれる保育者集団であるということがすばらしいことではないか、と思いました。

はじめのうちは泣いてばかりいた息子ですが、一ヶ月程通ったころには、迎えに行くとおもちゃで遊んでいる姿がみられるようになり、二ヶ月程たったころには、迎えにきた私をみても、にっこり笑って遊びつづけるようになりました。「ここは、自分の場所だ」とすっかり思えるようになったのでしょう。

転園も真近になった3月の中ごろ、保育ノートには次のように書いてありました。

『今日は、3月になって初めてと思えるほど春らしい日で、みんなで車の少ない所を選んで散歩に出ました。乳母車からおろすと、けいごちゃん(息子)も一人前にトコトコと歩き、よろっとよろけて一回おすわり、又気をとり直して、歩いて、又すわってと何回もたったりすわったりをくり返しています。細い路地にはいと、ひかるちゃんと一緒にブロックべいのかげにかくれてなかなか出てこないでじっと待っていると、2人でそろり顔を出してきて思わずニコリ。「けいごくん、しっかりあんよ」と声をかけると、トコトコ歩いて、その歩い

ているのにはずみがついて、まるで踊っているような感じぐんです。』

まるでよくできたテストを返された時のように、私はいつもうきうきして保育ノートを読みました。保育ノートはきまって息子に最高点をつけていくれました。おりこうさんにしていたというのではなく、いたずらをしてけんかをしたりしながらも愛に包まれ、息子がそこで幸せな時を過ごしたということがよく伝わり、それは親にとって何よりの幸せでした。ですので、帰りのバスの中で、家に着くのが待ちきれず、息子をひざにのせ、読んでみるのが日課でした。

ある日のこと、私の前に坐った親子も、カバンからノートを取り出しました。「ああ、家と同じように保育園帰りなのかな、どの親もやっぱり早く読みたくなるんだな」と面白いような気持ちでみていると楽しそうな声ばかりきこえてきました。

「今日Aちゃん保育園で何して遊んだのかな。読んでみようね。」

「うん、声に出して読んでね。」

「いいわよ。えーっと、Aちゃんは今日、砂場で物の取り合いをして、Bちゃんをたたいてしまいました。そして怒ってずーっと庭のまん中に立ったままです。」
（はじめはずんできたお母さんの声がだんだん小さくなりまりました。）

「素直にごめんなさいができるといいですね。」とお母さんは読み、しばらく考えています。

「Aちゃん、そんなことがあったの？　そういう時、ごめんねって言うのよ。」そう言って、気分をとり直し読み進めました。すると今度は「給食が食べるのがおそくて、最後になってしまいました。」という文面で、またまたお母さんは考え込んでしまいました。私はうしろで様子を手にとるようにわかり、このお母さんはどうするだろう、あんなに楽しみにノートを開いたのに、お小言ばかりで、もう子どもを叱ってしまうのかしら、と思ったりしました。すると、しばらくそのお母さんは笑って「そう、Aちゃん食べるの遅いの。いつも家で、お父さ

んもお母さんもゆっくりごはん食べてるからかしらね。」
と言い、ノートをしまったのです。そして2人は又楽しそうにおしゃべりをし、次のバス停で降りて行きま
した。

気持が沈んでしまいそうだったのに気をとり直し笑顔
で帰路についていったお母さん。とてもあたたかいお母
さんでした。保育者という職業についている自分への自
戒もこめながら、私はこの素敵なお母さんの姿を胸にき
ざみました。

その時私は思い出しました。ずっと以前に同じような
場面に出くわしたことがあるのです。しゃ断機の降りた
踏切のところで、怒ったお母さんが子どもに話していま
した。やはり保育園帰りの2人だったのですが、お母さ
んはブンブンに怒っていました。

「どうしてあんたは、棒で人をぶったりするの？」

「ぶってない」

「ぶってないということないでしょう。お母さんが迎え
に行くとき、いつも誰かが泣いていて、先生に言われるの

よ。そんなに、人をぶったりする子なら、もう保育園に
は行けないのよ。明日から行くのやめるの？ 行かない
の？」

お母さんは、手をギュッとにぎり、せきたてるように
言います。行かないの？ と言われても、行かないとい
られるはずもないのです。

「行くよ、行くよ」と泣きながら言ひ子。

「だったら、人をたたかないのよ」と言う母。私は、2
人をうしろからみていて、2人がそれぞれにかわいそう
でなりません。どうにもならない泥沼に、2人し
て入りこんで、いったい誰が救ってくれるのか、と思っ
たものです。

2組のおかれていた状況は似ていたと思います。けれ
ども、その後ろ姿はともちがっていました。こんなこ
とは、子どもとの生活の中では日常茶飯事のできごとで
しょう。けれどもその中に大事なことが隠れているよう
な気がしました。子どもと共にいる「時」を大切にす
る、ということは、決して、何でも叱らずに甘やかすと

いうことではないけれども、まずその子の今をうけとめていく。その上で一緒に幸せな明日を創るとしたら、親としての自分には何ができるのか、と考え行動する、ということではないでしょうか。「幸せな気分」というものは、自然にわいてくるだけでなく、いろいろなことを幸せに考えようとしてみることによって、次第についてまわるようになるのではないのでしょうか。親が幸せな気分に含まれることによって、子どもも幸せな気分になる。そして何か、いいこと、楽しいことをやってみたくなる。そんなうきうきした親子がふえていったら素敵だな、と思うのです。

ずいぶん長いおしゃべりをしました。母親になって、まだ一年三ヶ月。母親になったとたん私は変わる!?!と想像していましたが（なんと馬鹿げた想像でしょう）私は私のまま。母親としての自分、というのは、少しづつ子どもとつき合う中で育ってくるものなのでしょうね。

仕事に行きづまり保育園からの帰り道、息子を抱きながらしょんぼりとアパートの階段を登っていると、息子が私の肩をトントントン、トントントン、とたたきます。軽く軽くやさしくたたいたのです。まるで「元気だしなよ、お母さん」と言ってくれたようで、思わず涙がこぼれました。

どうやら我が家では、今のところ、もっぱら息子が幸せな気分をたくさんたくさん送りこんでいてくれるようです。